保育における豊かな原体験を目指して
―学生のアンケート分析に基づく考察―

学籍番号：54112048

氏　　名：瀬谷知栄子

Ⅰ　研究の目的

現代の子どもは原体験が減少しているといわれている。都市化や少子化、防犯などの影響で現代の子どもたちの原体験が減少し、偏っているのではないかと考える。原体験というのは、触覚・嗅覚・味覚及び視覚・聴覚の五感を重視した体験である。自然体験が不足してしまうことにより実感がなく体験の裏づけのない学習になってしまう。さらに体験の裏づけがない学習は理解することも困難である。幼児期の原体験は理科教育の基盤となるだけでなく、知的・情緒的な成熟やコミュニケーションの基盤となったりするため、生きる力を培うものと言うことができる。そのため意図的に体験活動を増やし、五感を使った子ども達の心に一生残るような体験を積極的にしていかなければならないと考える。そこで、本研究は現代の子どもたちの原体験の状況について明らかにし、その問題をどのように保育の場で補完し、子どもたちの健やかな発達を促すことが出来るか模索することを目的とする。

Ⅱ　調査方法

2014 年度にS大学教育学部で幼児の環境、生活、生活科教育法を受講した1年生から3年生を対象にした。

【調査日・人数】

①草花編	（男４２名	女１６１名	計２０３名）
②動物編	（男４１名	女１６１名	計２０２名）
③火・水編	（男４０名	女１６１名	計２０１名）
④地学・天文編	（男２５名	女１３０名	計１５５名）
⑤科学遊び編	（男２５名	女１３０名	計１５５名）

自然体験の4分野(草花編、動物編、火・水編、地学・気象・天文編)と科学遊び編の計5項目を調査対象として、①自己想起、②意見交換、③例示参照の3段階で各10分行った。

Ⅲ　調査結果

全項目をデータ化した後に、現代の子どもたちが多く体験したことがある項目を洗い出すため、該当者数を合計して項目を並べ替え、上位 30 位を抽出した。その活動の安全性を表1の基準で a,b,c に分類し、項目ごとの偏りを比較した。（図1） その結果、火・水編には危険度レベルbやcが多いことが分かった。さらに、火体験に至ってはaの項目が全くなく、家庭や学校でも危険なものから子ども達を遠ざける傾向があるのではないかと考えた。平成27年度の理科教科書から、マッチを使用するアルコールランプやガスバーナーではなく、実験用ガスコンロが使用されるようになっている。子どもたちから火を扱う機会を奪うことで、更に火の扱い方が分からなくなるのではないかと懸念する。

表１．原体験の危険度レベル

a	子どものみで活動できるもの
b	子どものみで活動することができるが、ルールを決めたり特別な環境構成をしたりする必要があるもの
c	危険であり、大人がついておく必要があるもの

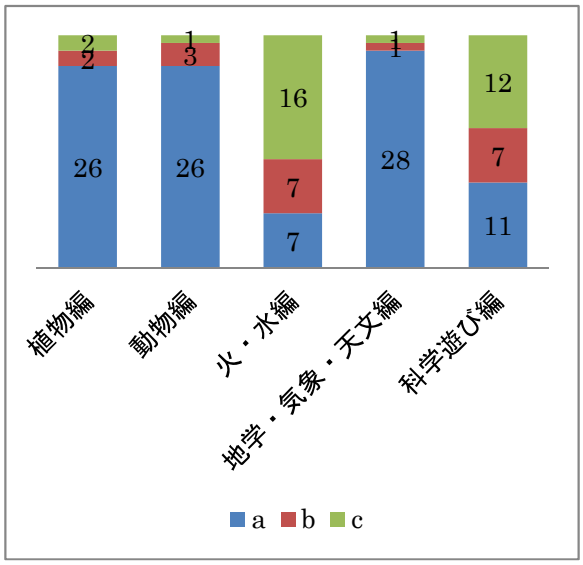

図１．各項目の危険度レベルの比較

Ⅳ　考察

危険なものは扱い方を知らなければ安全に扱うことができない。大阪ガスや東京ガスでは火育という火の魅力や火の力を伝える活動をしている。火の扱い方を知っていれば、災害が起きて電気が使えなくなった時にも暖を取り、料理することができる。保育者になる私たちは「火の暖かさ」や「火の美しさ」、「火の明るさ」などの火の魅力とともに火の扱い方について子どもたちに伝えていく必要があると考える。そのために園でできることは、冬場のたき火や焼き芋だけでなく、夏にキャンドルナイトやキャンプファイヤーを行ったり、子どもたちと灯篭を作って火を灯したりする機会を意図的に作ること、子どもが火を見て安心して美しいと感じることができる環境を作っていくことであると考える。その際、地域の方々と協力をして行うと、地域交流も行うことができる。扱いを間違えると危険であるからこそ、地域の大人たちが協力をしてこどもに働きかける必要があると考える。保育の場で火の体験をするためには、園の先生だけではなく、地域との協力が必要である。

（指導教員　福井　広和）